

風水害への心構え

台風や集中豪雨などの風水害から身を守るには、日ごろの備えや最新の気象情報を活用することが重要です。早めの準備と行動を心掛けましょう。

日ごろの心構え



- ・窓や雨戸を必要に応じて補強しておく。
- ・風で飛ばされそうな物は、家の中へ格納する。



- ・非常用品（飲料水、乾パン、懐中電灯、ラジオ、医薬品など）を準備しておく。



- ・周りより低い場所など、危険箇所を把握する。
- ・避難場所や避難ルートを確かめておく。

注意報・警報が出た時の心構え



- ・気象情報や外の様子に注意する。
- ・自治体が発表する情報に注意する。



- ・避難に関する情報に注意し、速やかに避難する。
- ・警報が発表されていなくても、早め早めの行動を心がける。

特別警報が出た時の心構え



- ・特別警報が出たら、直ちに命を守る行動をとる。
- ・避難場所へ避難するか、外出することが危険な場合は、家の中で安全な場所にとどまる。

※気象庁「大雨や台風へ備えて」を基に作成しています。

文化財

久保家文書  
大洲市指定有形文化財  
(古文書)  
個人所有



久保家文書とは、新谷藩領今坊村（現大洲市長浜町今坊）の庄屋久保家に伝来した江戸時代の古文書です。戦国時代、久保家は今坊と戒川の境に位置する滝山城の城主でしたが、豊臣秀吉の四国平定後は、下城して今坊村の庄屋を代々勤めるようになりました。

本文書は、村の運営などに関する公文書が中心で、天保期から幕末にかけての文書が極めて多く残されています。中でも天保9年（1838）、幕府の巡検使（大名の監視と情勢調査のために諸国に遣わされた上使）が村を通行する際、その受け入れ準備から通過するまでの様子を一部絵入りで詳細に記している文書などは貴重なものです。

新谷藩関係の古文書は数少なく、藩の制度、経済、民政などについて知ることのできる重要な史料です。

（昭和48年2月7日指定）

野鳥

イソヒヨドリ（磯鶉）  
スズメ目ヒタキ科  
全長 23cm



人家の屋根で、「ホイピーチョヒーシーチーイッ」と、上手なさえずりを耳にすることがあります。数年前までは、海岸部に行かないと出会えない野鳥でしたが、著しい環境の変化か、それともコンクリートの建物を海辺の岩場と認知したのか、町の中に進出してきました。町には営巣のための隙間があり、餌となる昆虫は街灯に集まってくるため、住み心地がよいのかもしれない。

人間社会に適応できた生き物は、うまく繁殖していますが、今や地球上のほとんどの生物たちが、人間の経済活動によって生息場所や繁殖地を奪われています。絶滅危惧種が増えないよう、私たちが何かお手伝いできたらと思っています。

NPO法人かわうそ復活プロジェクト④

## 新谷藩主加藤家の文化財 第壹幕

これまで、「大洲藩主加藤家の文化財」と題して、市指定史跡「大洲藩主加藤家墓所」と市指定有形文化財（絵画）「大洲藩加藤家歴代画像14幅」について紹介しましたが、今回からは、大洲藩加藤家の分家である新谷藩主加藤家の文化財について、市指定史跡「新谷藩主加藤家の墓所」を紹介します。

## 加藤直泰（かとうなおやす）

加藤直泰は、元和元年（1615）伯耆国米子で生まれました。父貞泰が亡くなった後の寛永11年（1634）、兄泰興（大洲藩2代藩主）との間で分知（領地を分けること）を巡る騒動を引き起こします。

この騒動の原因は、貞泰の遺言を基につくられた「御袋文」と呼ばれる文書の有無です。この文書には、直泰が15歳になった時に、大洲藩6万石のうち1万石を直泰に分けるようにと記されていて、この文面をもとに直泰は分知を迫ります。しかし、兄泰興はこれを拒絶、両者とも譲らないまま5年が過ぎ、寛永16年（1639）、加藤家親族代表の調停によってようやく解決しました。これにより直泰は、6万石の内1万石の内分分知（本家は領地の一部を分け与えても、石高は減らされない分知のこと）をうけ大名となりました。直泰は、寛永18年（1641）、



加藤直泰の墓所

27歳で初めて大洲に入りますが、まだ屋敷地が定まっていなかったため、さっそく陣屋を新谷と定め、侍屋敷などの建設を進めました。さらに、烏丸家から堂上派歌道（うすまら）を学び、北野能円（きたののうえん）から古今伝授を受けた直泰は、歌道に優れた藩主と伝えられ、その後の大洲藩主や新谷藩主も堂上派歌道を学ぶなど、大洲・新谷藩の和歌の系統は、直泰に始まったと言われています。

寛文9年（1669）、大洲藩加藤泰義（泰興の子）の長男覚十郎（かくじゅうろう）を養子とした直泰は、天和2年（1682）、新谷において68歳で没しました。法眼寺（ほうげんじ）に葬られた直泰の墓碑は、新谷藩主の中で唯一、五輪塔で祀られています。

## 大洲商工会議所青年部 大洲ご当地クイズ

毎年8月3、4日は、大洲川まつり花火大会が行われます。およそ4,000発の打ち上げ花火が上がり、たくさんの人でにぎわいます。

昨年度から本町1丁目の商店街では、サンロード本町夜市が復活し、注目を集めています。以前は、商店街メンバーを中心に花火大会に合わせて夜市を行っていましたが、メンバーの減少により、中止を余儀なくされていました。県外から帰ってきた若いメンバーで復活の話が盛り上がったことがきっかけで、開催に至りました。今年も開催予定です。復活したサンロード本町夜市に出かけてみませんか。

## 【今月のクイズ】

昨年度、本町1丁目の商店街で復活した夜市は、何年ぶりに復活したのでしょうか。

- ① 3年
- ② 11年
- ③ 23年



## 【先月号のクイズの解答・解説】

水天宮の花火大会を運営している組織は、次のどれでしょうか。

- ① 柚木一歩会
- ② 水天宮保存協会
- ③ 水天宮百歩会

解答…①

解説…肱川に架かる富士橋（とみす）のたもとに、小さな社殿と赤い鳥居があります。これが大洲の水天宮で、付近には、肱川で最も深く危険といわれる臥龍淵があり、一帯では、昔から水難事故が後を絶たなかったそうです。水難予防と犠牲者の供養のために、明治20年に勧請し、小さな祠を建てたのが柚木水天宮の始まりのようです。



※今月のクイズの答えは、広報大洲9月号に掲載します。

## おおずの女性 ～輝いて今～

### ともに考え、ともに実践する

〈第20回男女共同参画社会づくり推進県民大会〉

男女がお互いに人権を尊重し、個性と能力を発揮できる男女共同参画社会の実現を目指すことを目的に、第20回男女共同参画社会づくり推進県民大会が6月17日(水)、松山市のひめぎんホールで開催されました。

当日は、「第1回愛顔あふれる男女共同参画フォトコンテスト2015」表彰式が行われ、最優秀賞1作品と優秀賞2作品の撮影者に賞状と副賞が贈られました。

その後、映画字幕翻訳者、通訳として活躍されている戸田奈津子さんによる「字幕の中に人生」と題した基調講演がありました。

講演で戸田さんは、戦時中に石鎚山のふもとにあった祖父母宅に疎開していたことや、終戦後、映画と出会い、その魅力に引き込まれ、大学を卒業後映画翻訳家を目指したが、当時の映画翻訳家が全て男性だったために、なかなか職に就くことができなかつたことなどを話されました。



最後に、「女性の活躍が企業・地域のチカラに―愛顔で輝くために職場や地域ができること―」と題し、地域や職場で男女が共に助け合う社会づくり実現に向けた取り組みについてパネルトークが行われました。

大洲市からは、大洲女性団体連絡協議会の会員と第12期おおず女性塾の塾生ら合わせて18人が参加し、今後の活動に役立てようと真剣に耳を傾けていました。

## ALT(外国語指導助手)のつぶやき

### お勧めのハワイビーチ



リード・サカモトさん

ハワイには、美しい観光スポットがたくさんあります。なかでもビーチには、多くの観光客が訪れ、マリンスポーツファンや漁師、海水浴を楽しむ家族連れなど、多くの人たちを引き込む力があります。今回は、オアフ島周辺の有名なビーチや隠れた名勝をお勧めします。

まず始めに、マジックアイランドです。ここは、ワイキキのリゾート地近くにあるにもかかわらず、訪れる人は少なく、家族連れにお勧めです。消波ブロックの中にあるため波も少なく、小さな子ども連れの旅行者にも安全です。ピクニックやバーベキューにもってこいのスポットです。

次に島の南東端に位置するサンディビーチは、海岸をえぐるような強い波で知られていて、ボディサーフィンやボディボードに興味がある人にお勧めします。しかし、とても波が強いため、初心者や未熟なマリンスポーツ愛好家は立ち入らないよう注意されています。たとえ水の中に入らなくても、見物すべき偉大な景色を楽しめます。

最後にワイマナロビーチです。このビーチは、島の東部のリゾート地に位置し、人里離れた場所にあるため、多くの観光客はここを訪れ損ねます。最近、ワイマナロビーチは、アメリカのナンバーワンビーチに格付けされました。オアフ島で最も長い海岸線を有していて、砂浜を歩くのを楽しみたい人には最高のビーチです。



マジックアイランド



サンディビーチ



ワイマナロビーチ



6月20日(土)

## 礼に始まり礼に終わる ～武道体験フェスタ in 南予～

県内にある9武道団体が一堂に会し、「武道体験フェスタin南予」が市総合体育館において、県スポーツ振興事業団などの主催で開催されました。

当日は、約450人の親子連れらが参加し、弓道やなぎなた、柔道など9競技を楽しみました。

今回は、競技の体験だけでなくスタンプラリーやクイズ大会もあり、武道を楽しく学びました。



6月7日(日)

## ホタル観賞と音楽の夕べ ～河辺ふるさとの宿ホタル祭り～

今年も河辺初夏の風物詩、「ホタル祭り」が開催されました。

当日は、ホタルについての講習や大洲高等学校コーラス部の合唱などが行われ、その後、参加者全員で屋根付き橋からホタル観賞を行いました。

参加者は、幻想的な光を放って飛ぶたくさんのホタルを楽しみました。



7月1日(水)

## 大洲ブランド確立へ ～大洲ええモンセレクション認定審査会～

今年度で第4回目となる大洲ええモンセレクション認定審査会が、大洲市文化研修センターで開催されました。今回は、新規5業者12品目を含む11業者23品目の商品の申請がありました。

申請者からプレゼンテーション形式による商品説明があり、5人の審査員は試食や質疑応答をしながら、真剣な表情で審査を行っていました。



6月19日(金)

## 伊予灘の海を見ながら一杯 ～夕焼けビールトロッコ列車～

四国旅客鉄道(株)企画の「夕焼けビールトロッコ列車」のオープニングイベントが、伊予長浜駅で開催されました。駅では、到着した乗客をオカリナの演奏や地元産品の販売などで出迎えました。

大洲市観光協会長浜支部の村上副支部長は「今日限りでなく、何度も長浜にお越しください」とあいさつしました。

## 将来の夢に向かって

### 中学生職場体験

市内の中学校では、キャリア教育の一環として、生徒が市内のさまざまな事業所に向きき体験学習をしています。この事業を通じ、実際の職場を見ることで、職業観を養うとともに、働く人々と接することで勤労の意義や社会人としての心構えや在り方を学んでいます。

長浜・新谷・大洲南・肱東の各中学校では、6月30日(火)から7月8日(水)までのうち3日間で、職場体験を実施しました。残る、大洲東・平野・大洲北・肱川・河辺の各中学校は、2学期(9月～11月)に実施する予定になっています。



新谷中学生 パティスリーにて

市役所には、7月1日(水)から3日(金)まで肱東中生徒2人が、7月6日(月)から8日(水)まで大洲南中生徒3人が訪れました。生徒たちは、3日間で複数の課の仕事を体験し、自分たちの生活に市役所がどのように関わっているのか、また、職員が住民とどのように接しているのかなどについて学びました。

企画政策課で広報の仕事を経験した、肱東中2年生の尾和拓真さんと山本裕太さんは、今月号に使用する写真の撮影をするともに、文章や日付に間違いがないかなどの広報誌全体の校正を行いました。



肱東中学生 市企画政策課にて

## 全国大会での活躍を誓って

6月23日(火)、第20回全日本女子ユース(U-15)アンダーサッカー選手権大会に四国代表として出場する、愛媛FCレディースMIKANの選手とスタッフ13人が、市役所を訪れ大会へ向けての意気込みを語りました。

MIKANは、今年の3月に愛媛FCレディースの15歳以下の下部組織となり、大洲市や松山市などの中学校に通う生徒26人で構成されています。そのうち10人が、市内の中学校に通う生徒です。

チームは、毎週土日に愛媛FC梅津寺グラウンドなどで全体練習に励み、5月に行われた県、四国大

会で優勝を収めました。なお、このチームの前身である「AC. MIKAN」は、2009年にも同全国大会に出場しています。

清水市長は「優勝を目指してプレーすることも大切だが、全国のほかのチームの人との交流も大切にしてほしい。全国に友達を作って、愛媛を、そして大洲をアピールしてほしい」と激励しました。

選手たちは「優勝を目指して頑張りたい」「チームのみんなを信じて頑張りたい」「全力でプレーしたい」「得点を取って勝利に貢献したい」など、それぞれの決意を述べました。



(写真提供：MIKAN)





肱川の洪水による浸水被害を防ぐため、国・県・大洲市が長浜町上老松地区で平成19年度から進めてきた宅地かさ上げなどの整備事業が終わり、6月28日(日)、記念碑の除幕式および竣工式が行われました。

今回の事業では、国が河川延長880㍍、約3・8㍍の宅地を約3㍍かさ上げて堤防とする工事を行い、県が大和橋の架け替えや県道改良工事を行いました。さらに、市が同地区の区画整理事業を行いました。

## 上老松地区整備事業完了 じよろまつ



竣工式には地元住民や行政関係者、国会議員ら約100人が出席し、中村知事が「肱川は、なくてはならない恵みの川であると同時に、洪水などで大きな被害を与える恐ろしい川でもある。今回の事業完成により、地区住民の安心度が高まったと思う。これからも肱川流域の安全度を高めたい」とあいさつしました。

式終了後には、関係者によるくす玉開披と、大和小学校の児童らが風船を飛ばして完成を祝いました。

## 青年海外協力隊員表敬訪問

平成27年度青年海外協力隊第1次隊の一員として、大洲市長浜出身の梶田真緒さんがアフリカ中部の国カメルーンに派遣されることになりました。

派遣期間は、平成27年7月から平成29年6月までの2年間で、派遣先のカメルーンでは、主にンヴィラ県初等教育事務所に所属し、現地の幼稚園や小学校教員らと協働しながら環境教育を行います。また、情操教育分野で派遣されているボランティアと連携し、授業の充実化および教員の指導技術の改善を支援しながら、教育の質の向上に貢献する予定になっています。

6月25日(木)に市役所を訪れた梶田さんは、清水市長から「派遣国の歴史・文化を学びつつ、日本の良さをアピールしてほしい。楽しみながら活動して、現地の人の笑顔を増やしてほしい」と激励を受けました。

梶田さんは「JICA青年海外協力隊事業50周年、カメルーン派遣10周年という記念の年に、派遣されることをうれしく思う。2年間で多くのことを吸収して、将来、愛媛や大洲に還元したい。教育という目に見えない分野だが、第1歩を踏み出せる活動にしたい」と抱負と意気込みを語られました。

